

あるいは未明について ――天に不測の風雲あり

後藤敏斤

かなしいと感じたときは吠えてみる

鶴の寝ついた頃に

漆黒の闇を突き破り

おまえの そのけものの慟哭にも似た

掠れたうめき声は

けものの時代の末裔たる由縁

誰にも聴こえないその声は

潰れたまま八つ当たりに突き刺さる

オオカミでさえ人知れぬ涙を隠し 寝入ることもある

遠い先祖からの その獰猛な宿命に揺さぶられた思い

自らの中に長い連鎖を感じとり

野蛮な熱さを気に留める

かなしいと感じられたら空を見よ

光は覗き見えても その思いは月にも星にも届かない

悲しさが螺旋の渦を巻き

不寐な祈りばかりただ滞る

聞こえてくるのは救いなどでは無くて

泣き叫ぶ雄叫びのような金切声ばかり

夏は去る 冬は往く

季節をまたいで無垢な蝉たちもまた

鳴き声を世代にわたって繋いでいく

途切れ途切れを必死さで庇い

ときおり夜の漆黒に押しつぶされそうなら

吠えてみる

その圧力に抗しながら

残酷な気まぐれさに耐えてみる

そのうち夜半の幕は終演に向かっていった

何処からか仄かに白みかけてくる気配が

暖かさに肌の感触が 指先が 帰ってくる

そうか通り雨だったんだ

なんだ 雲の厚みだったのか

いたずらな間合いさ

ほんのひと握りばら撒いただけ

ただ その棘いっぽんの圧力が気にかかるけど

理想だって？ 遠くに見えていたね

近づいても離れていくばかり 追いつくことは無い

生とはもともと予想外の連続さ

息つく暇無く合わせていくしかない
ゲームが終了するまでは

まだ明けきらない真っ暗な早朝のこと

寝ぼけた梟の声が響いている

そのうち 渡りゆく時鳥が季節を知らせ

小鳥たちが ようやく語り始めた

そして やっと僕たちは陽の射す予感を感じ始める

前線は昨夜のうちに行ってしまい今日は朝から北風が強く朝から晴
れ間が続くことでしょう

古屋敷

後藤敏斤

長い月日で積もる机上の埃

遠い時代をそのままに 旧態依然と居座った古屋敷

内装の絨毯は傷だらけで端がほどけて糸くずの玉

箆笥にはシールを剥がした跡

レコード盤 木製の巨大なスピーカー 壊れたオーディオの機器

既に戦後から三十年以上経過していたあの頃でも

いまだ戦争の面影を残していた地方都市

学生時代は友人同士でここに集まって 八ミリ映写機で

旧日本空軍の活躍を見たものだった

敵国の戦艦にゼロ戦が突っ込んでいく姿

古い映写機を不器用に回しながら

ときおりフィルムが焼けつくのを気にしていた

今ではこの古屋敷自体が八ミリ映像に現れてきそう

その古屋敷の主は 巨大な転宅用のトラックを借りて

久しぶりに郷里に帰ってきた

狭い駐車場に上手く駐車して見せる

そういえば 学生の頃はゴーカートの名手

助手席で感心しながらその運転を見守ったものだった

久しぶりに彼が帰省した目的は

自宅の古屋敷の処分

思い出を掘り起こしたその手で 早速手放すつもり

学生時代の飄々とした風貌のまま

どこか悪戯で好奇心な目が軽く言う

そんなこともあったよな

懐かしくても振り返らない前向きで強かな人柄

一方において古屋敷は近いうちには片付いて

誰も知らない遺跡となり歴史の片隅へと押しやられる予定

きつと更地になった後は

行き交う人々が何も気に留めず通り過ぎることだろう

誰か 夕日がせめてまだ熱いうちに ひとに告げよ

自らが熱かった時代のあったこと

ここに住むひとびとの 息づくころがあったのを

将来に夢をはせていた学生たちがいたことを

その最期を迎える古屋敷

威厳を保ったまま

語ることなく泰然自若として

夕日を背に その影を誇らしげに

長く長く地上へ映し出している